

観察のまど 子どものにわ (4)

砂上史子

三歳児の「ごっこ遊び」 における場づくりの援助

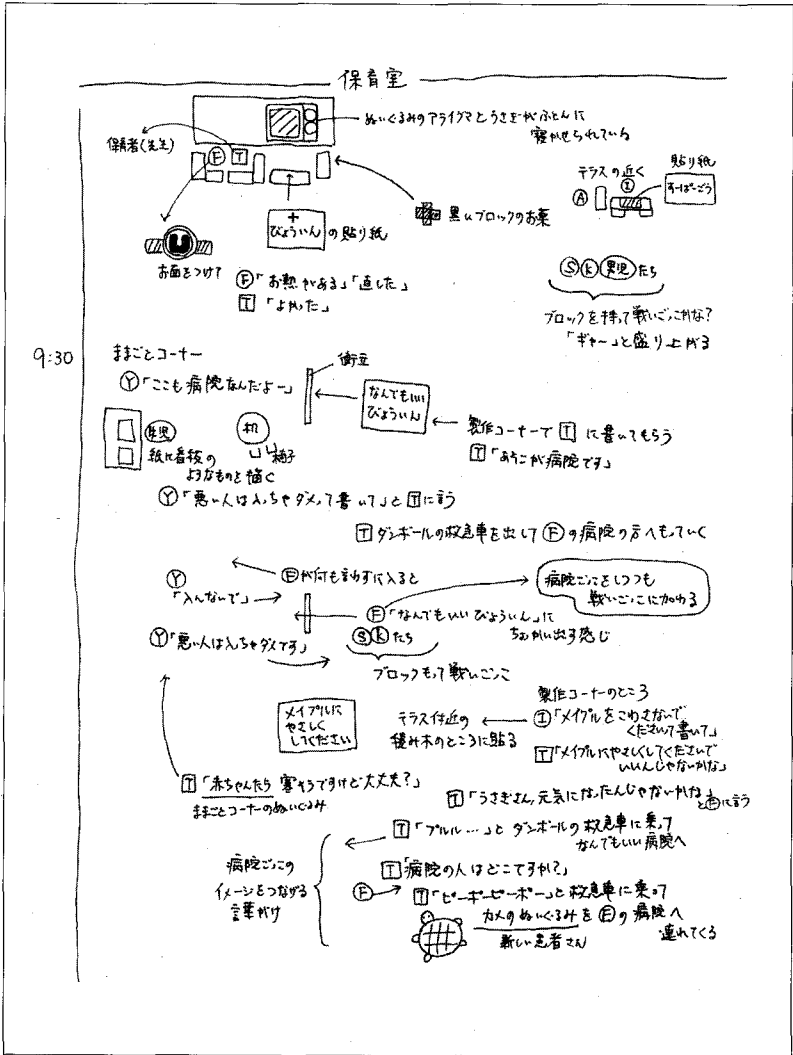
ごっこ遊びにおける場づくり

幼児期の遊びの中でも、自分とは異なる別の人物になりきったり、ここではないどこか別の場所を想定したりして遊ぶ「ごっこ遊び」は特に盛んに行われます。花柄のスカートを履いたり、ベルトやお面を付けたりするだけで、子どもはお姫さまやヒーローになった気分です。保育室や園庭を動き回ります。それと同時に、子どもたちはままごとコーナーや自分たちで囲んだ積木の場などを、ごっこの

拠点にするようになります。今回は、三歳児の「病院ごっこ」の事例から、子どものごっこ遊びにおける場づくりの意味と、保育者の援助のあり方について考えてみたいと思います。

戦いごっこと病院ごっこを 行ったり来たりしながら遊ぶ

図1は、三歳児クラス、十一月の保育室での病院ごっこの事例です。図1を見てわかるように、一つの保育室の中にFくんの病院とYちゃんたちの二つの病院があります。Fくんは、戦隊もののヒーローのお面も付けているので、病院とヒーローという二つのイメー



▲図1：病院ごっこ

ジをもっているようでした。

この日の観察の後に、担任の先生に聞いたところ、「Fくんは、いつもはほかの男の子たちと戦いごっこをしていることが多く、づつづつで遊ぶ」という感じで、居場所がもてない様子だったが、この日は一人で病院ごっこを始めることができてよかった」とのことでした。

Fくんにとって、この日は、いつもの戦いごっこのお面も付けつつ、病院ごっこという場、すなわち居場所を作って遊びを展開し始めた日であったようです。

また、図1で、Fくんが途中、Kくんたちとブロックを持って戦

いごっこをする様子からも、これまでの慣れ親しんだ戦いごっこと新しい病院ごっこの両方を行ったり来たりしながら遊ぶFくんの様子がわかります。このFくんのように、ごっこ遊びに複数のイメージが入り込んでいることは、珍しいことではありません。最初は一つのイメージで展開していても、周囲の物や人から刺激を受け、新しいイメージがどんどん取り込まれるところが、ごっこ遊びの面白さであるともいえます。コロコロと物語や設定が変わっていく楽しさを共有しながら、保育者はごっこ遊びをさまざまな形で援助していきます。

先生に「びょういん」の 貼り紙を書いてもらう

図1では、Fくん、Yちゃんたちの病院に「びょういん」「なんでもいいびょういん」「Iくんの積木で囲った場に「すーぱーごう」と貼り紙があります。まだ自分で文字を書くことがおぼつかない三歳児は、先生に文字を書いてもらい、それを自分たちのごっこ遊びの場に貼っています。

保育の後、先生に話を聞いたところ、「子どもたちが先生にごっこ遊びの貼り紙や看板を書いてもらうことは、自分の居場所づくりの意味がある。文字でその場所が

何であるかを示すことは、その場で何をしているかが、本人たちにもわかると同時に、ほかの子どもにもわかってもらう小道具としての意味がある」とのことでした。

図1の子どもたちの様子から、遊びの場に込めたイメージや思いは、最初から子どもたちが抱いているというだけでなく、文字を書いてくれる先生という存在を契機として、子どもたちの中に喚起される、という側面ももっていることがわかります。イメージに合わせて道具を用いるというだけでなく、道具の存在によってイメージが深まり、表現されるという側面があるのではないのでしょうか。

その意味で、子どものごっこ遊びの場を、それがどのような意味をもっているのか目で見てわかるように、保育者が文字や標識などによって表す手立てを提供していくことは、遊びが深まっていく上で重要な援助であるといえます。

細かなこだわりを持って遊ぶ

また、図1の中で、Yちゃんが「悪い人は入っちゃだめって書いて」などと、先生に言っているように、子どもが自分の遊びの拠点となる場に抱くイメージは、具体的であると同時に、ほかの子どもの存在を意識したものになっていることがわかります。

「なんでもいいびょういん」でありながら「悪い人は入っちゃだめ」というところが何とも面白いところですが、ほかの子どもとの関係が深まり、ごっこ遊びの経験も積み重なるにつれて、子どもも「ああしたい、こうしたい」というこだわりは、より具体的に細かくなっています。何も言わずに「なんでもいいびょういん」に入ってきたFくんは、「人じゃない」とYちゃんが言っているように、遊びのこだわりを伝え合っていくことが、人とかかわりや物とかかわり方を学ぶ機会にもなっているのでしょうか。

遊びの援助として子ども

メージを引き出すことは、子どものもつこだわりを引き出していくことにもなります。こだわりをめぐるトラブルが生じた場合、単に「みんなで仲良く」と投げかけるのではなく、「どうしてそうなのか」というこだわりを大切に、それがほかの子どもにも伝わるような援助が大切になってきます。そのような葛藤を通して、互いに共通のイメージで遊ぶ楽しさを経験していく姿が育つのだと思います。

さりげなく、言葉遣いや

振る舞いの感覚を養う

図1の先生のかかわりの中で興

味深いのは、Iくんが「メイプルをこわさないでくださいって書いて」とM先生にお願いした際に、M先生が「メイプルにやさしくしてくださいでいいんじゃないかな」と応じているところです（メイプルは、アニメ『プリキュア』に登場する小動物の名前に由来するうさぎのぬいぐるみだったようです）。後で、先生に聞いたところ、先生はIくんが「ころさないで」と言ったと受け取り、「ころす」という言葉を書くことはできないと考えて、このように応じたとのことでした。

遊びの中でぬいぐるみや人形を扱う場合、それが生きているもの

というイメージをもつものであることから、「こわす」「ころす」という表現ではなく、「やさしくする」という表現に置き換える点に、子どもの言葉の感覚や、生きものの思いやりを大切にする保育者の細やかな配慮が感じられます。

図1の中で、M先生が「なんでもいびよういん」の中のぬいぐるみについて「赤ちゃんたち、寒そうですけど大丈夫？」と女の子たちに尋ねていることも、患者である赤ちゃんに対する扱い方を、子どもたちに気づかせる言葉かけであるといえます。

ごっこ遊びでは、子どもは「今・ここ」の世界を離れて、イ

メーヂの世界を自由に楽しみます。しかし、ごっこ遊びだからといってどのような表現でも許されるわけではありません。むしろ、ごっこの世界にふさわしい言葉遣いや振る舞い方を、その役になりきって行うことで、よりごっこの世界を楽しめるといえます。その意味で、保育者が子ども以上に子どものイメージの世界に入り込むことで、子どものごっこの世界をより豊かにしていけるのではないのでしょうか。

先生のちよっとした

かかわりて遊びが展開する

ごっこ遊びは、主にイメージの

世界で子どもたちが何らかの役になりきって、そのふりをするのが楽しみの一つですが、漠然と「病院」「戦い」などのイメージはあっても、具体的なふりの中でそれを表現していくことは、子どもたちだけでは展開しにくい場合もあります。

そんなときに、図1の中で先生が「うさぎさん、元気になったんじゃないかな」とFくんに声をかけたたり、「ピーポーピーポー」と段ボールの救急車に乗って、カメのぬいぐるみ(新しい患者)を持ってきたりしているように、先生のちよっとした言葉かけや動きが、病院ごっこのイメージをつな

げ、子どもの次の動きを生み出していくといえます。

ごっこ遊びでは、抱いているイメージに比べて、表現される言葉や動きが断片的である場合もあります。そのようなときに、場や道具などの目に見える物で子どものイメージを支えると共に、それを使った言葉と動きのきっかけを、保育者が投げかけていくことが大切になると思います。そのためには、図1の先生のように、ごっこの外側と内側を行き来しつつ、子どもと共にごっこを楽しむ姿勢が重要になるのだと思います。

(千葉大学 教育学部 保育学
保育内容と発達との連関を研究)